

人間文化研究機構のなかの地球研

地球研は、国立大学法人法に基づき、2004(平成16)年4月1日に設置された大学共同利用機関法人人間文化研究機構(2010(平成22)年10月1日付け現在で、地球研のほか、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、以下、機構)の一員となりました。地球研としての独自の研究を推進する一方、機構の進める連携研究、研究資源共有化推進事業、地域研究推進事業等の新規事業に加えて、公開講演会・シンポジウムなど、同機構主催の諸事業や共同利用活動に積極的に関わっています。とくに、連携研究「日本およびアジアにおける『人と自然』の相互作用に関する統合的研究：コスモロジー・歴史・文化」を地球研、日文研、国語研が中核機関として進めています。また、機構による地域研究推進事業「現代中国地域研究」の一拠点として、「中国環境問題研究拠点」の研究活動を進めています。

人文社会系の研究機関を中心とする機構のなかで、地球研は自然系アプローチを含む統合的な地球環境学の研究を人間文化の問題として位置づけ、重層的かつ多面的な共同研究・共同利用を行う機関として未来に向けて大きな可能性を秘めています。

● 連携研究「日本およびアジアにおける『人と自然』の相互作用に関する統合的研究：コスモロジー・歴史・文化」

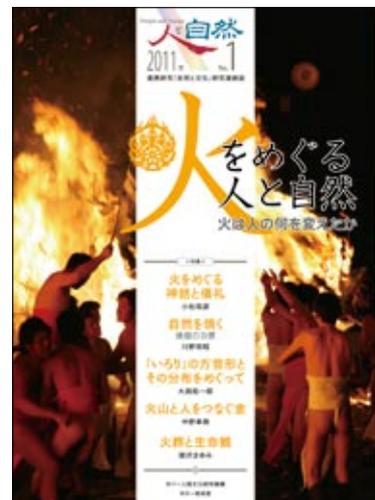
本研究は、人間文化研究機構の連携研究として行うものです(通称、「人と自然」)。「人と自然」の研究では、人と自然の多様なかわりを考古、歴史、民族(俗)、環境、思想などの多様な観点から解明することを目指しています。とくに、日本や広くアジア地域における集団を対象として、それぞれの集団が自然とのかかわりの中で育んできた歴史や文化とその体系としてのコスモロジーに注目して研究を実施します。人は自然界の資源を生活や生存のために利用するだけでなく、自然を模倣し、あるいは自然を映す独自の表象として、技術、絵画、詩歌、造形物などをとおして自らの文化に取り込んできました。歴史的に多様な形で展開してきた人と自然の相互作用を、多面的なアプローチから明らかにすることが研究の大きなねらいです。

この連携研究には、地球研のほか人間文化研究機構に属する5つの機関の研究教育職員や、全国の国公私立大学の教員が共同研究者として参加しています。本研究は2010(平成22)年6月に開始し、共同研究会、現地調査を開催してきました。今年度以降も、日本国内各地やアジア地域を対象とした調査研究を実施します。

研究組織として、言語を中心とする自然認識や民族分類を扱うグループ、絵画・図像などの造形物や儀礼などを中心に扱うグループ、自然の開発や管理をめぐる制度や実践を扱うグループに分けて、研究を進めています。

また、研究連絡誌として『人と自然』を年に2冊発行することとしました。創刊号として特集「火」を取り上げ、火を主題とする人と自然の多様なかわりを独創的な視点から展開しています。今年度以降も、「音をめぐると自然——音とことばの接点」についての特集をはじめ、幅広い視点からの問題提起を目指しています。

2011年3月発行の『人と自然』創刊号特集「火をめぐると人と自然——火は人の何を変えたか」では、火山、調理、焼畑、火葬、火への信仰、火をめぐると言語多様性などを扱っています



● 中国環境問題研究拠点

総合地球環境学研究所(地球研)中国環境問題研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)の現代中国地域研究推進事業の一環として、全国6つの大学や研究所に設置された研究組織の1つです。現代中国地域研究は、日本における現代中国研究のレベルアップ、学術研究機関間のネットワークの形成、次世代の研究者養成を目的として、地球研の他に早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、東洋文庫、京都大学に設置されています。

地球研では地球環境問題の解決に資する複数の研究プロジェクトを中国各地域で実施しています。この研究拠点では、これら地球研の研究プロジェクトの成果を土台に「開発による文化・社会の変容」という視点で、中国の環境問題を自然・人間文化の両面にわたって相対的に捉えようとしています。具体的には毎年中国環境問題に関わる異なるテーマを設定し、各種研究会やフォーラム、国際シンポジウムを開催しています。2007年度の「水」にはじまり、2008年度は「食と農」、2009年度は「都市化」をテーマとしてきました。

2010年度は地球研のプロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」と協力して、プロジェクトの基本コンセプトである「エコヘルス」と、経済的に影響力を拡大する中国の最前線の1つである「西南中国」をテーマとし、研究会を重ねました。それら研究会での成果をふまえて、2010年11月には、第5回となる国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」を雲南省・昆明市において雲南大学民族学院と共同で開催しました。

また、2010年1月には現代中国六拠点合同の国際シンポジウム「環境問題：現代中国の未来可能性」を中心となってコーディネートしたほか、NIHUの人間文化研究総合推進事業の一環として国際ワークショップ“Environmental Governance in China”を2010年3月に開催しました。さらに、2011年2月には九州大学東アジア研究機構と「東アジアにおける砂漠化防止国際シンポジウム」を共催しました。こうした活動を通じて中国環境問題に関わるさまざまな国内外の研究機関、研究者とのネットワークを築きつつあります。

設立当初より、ニュースレター『天地人』を定期的に発行し、本研究拠点での成果を発信するとともにネットワーク形成に努めてきました。2010年度は、国内外の中国環境問題に関わる書籍、論文、研究会等の研究情報を広く収集し、これをWEBや『天地人』に掲載するとともに、NIHUの研究資源共有化事業の一環として開発された nihuONE データベースを利用して公開しました。



中国環境問題研究拠点のニュースレター『天地人』



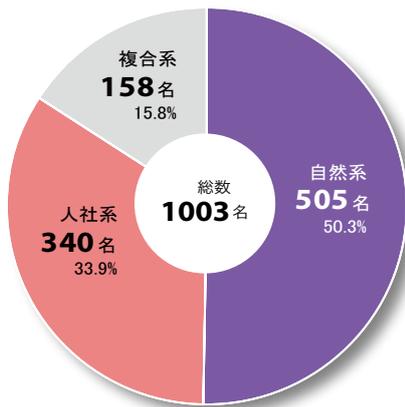
2010年11月2日に雲南大学で開催された国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」



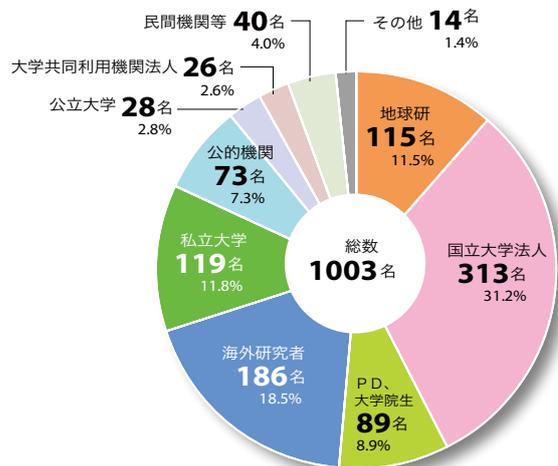
2010年1月30・31日に京都大学で開催された現代中国六拠点合同国際シンポジウム「環境問題：現代中国の未来可能性」

● 共同研究者の構成比率

地球研は大学共同利用機関として、地球環境学に関わる多くの分野・領域を横断する総合的な共同研究を推進するため、我が国の大学をはじめ、各省庁、地方公共団体（公的機関）や民間の研究機関、さらには海外の研究機関と密接な連携を図っています。



研究分野構成比率



所属機関構成比率

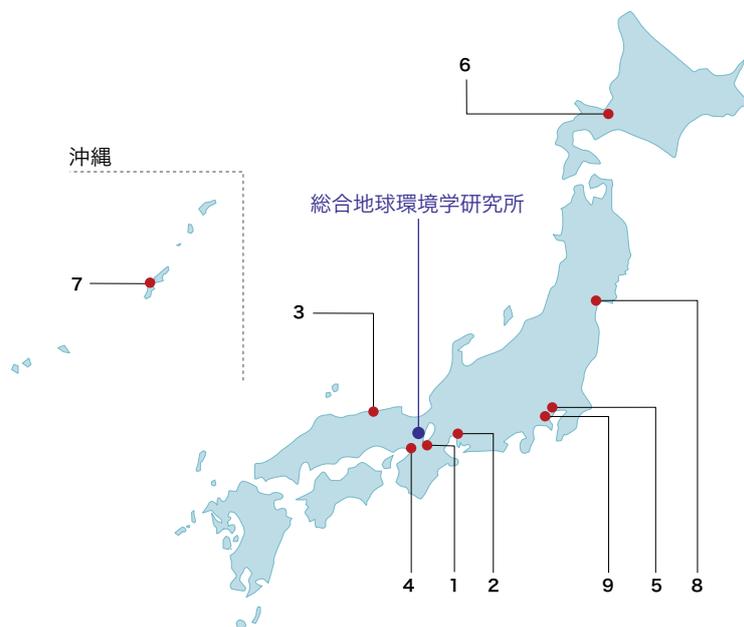
(2010年5月1日現在)

● 国内の連携研究機関

地球研では、以下に示す全国9つの研究機関などと人事異動をともなう連携を図って研究を進めてきました。第Ⅱ期中期目標・中期計画期間においては、より多くの大学や研究機関と積極的に連携を深めていきます。これら9つの研究機関以外に2009年度には名古屋大学大学院環境学研究所と連携大学院に関する協定を結び、2010年度には九州大学東アジア環境研究機構と学術交流に関する包括的な協定書を取り交わしました。

連携研究機関

1. 京大生態学研究センター
2. 名古屋大学地球水循環研究センター
3. 鳥取大学乾燥地研究センター
4. 国立民族学博物館
5. 東京大学生産技術研究所
6. 北海道大学低温科学研究所
7. 琉球大学熱帯生物圏研究センター
8. 東北大学大学院理学研究科
9. 横浜国立大学大学院環境情報研究院



● 海外の連携研究機関

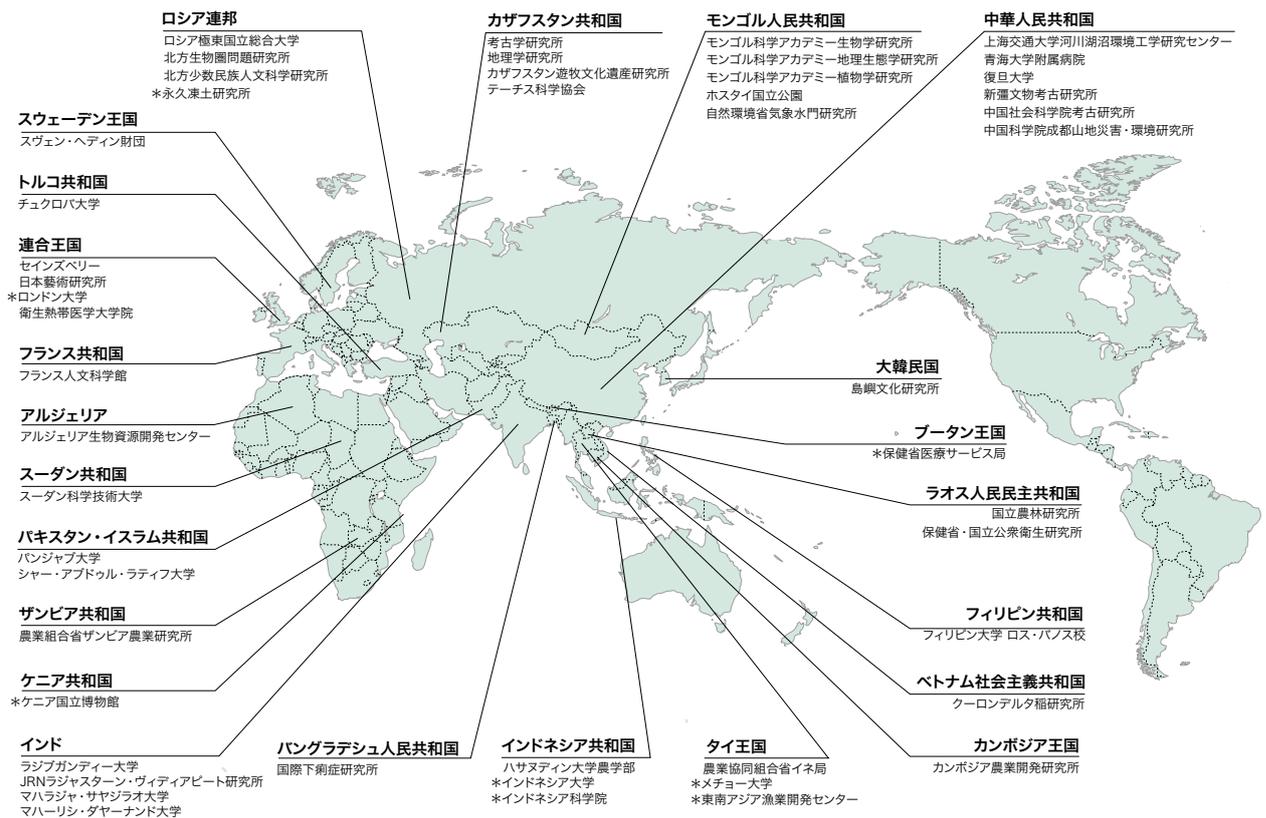
地球研では、海外の研究機関・研究所などとの間で積極的に覚書および研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めています。また、海外の研究者との連携をさらに密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。なお、2010年度は、イギリス、インドネシア、ケニア、タイ、ブータン、ロシアなどの海外の研究機関や東南アジア漁業開発センターと8つの覚書または研究協力協定を締結しました。



ブータン王国保健省医療サービス局との覚書締結(2010年10月)

覚書および研究協力協定の締結 (2011年4月1日現在)

*は2010年度に覚書を締結した研究機関



研究成果の発信

地球研では、研究成果を広く社会に還元するため、一般市民や研究者を対象にしたシンポジウム、フォーラム、セミナー等のイベントを開催しています。また、総合地球環境学に関するさまざまな刊行物を積極的に出版しています。

● 地球研国際シンポジウム

地球研の研究成果を世界に発信することを目的として、国内外の学術コミュニティを対象に年1回開催しています。その年度に終了する研究プロジェクトの研究発表を中心に、最新の研究活動や海外諸国の地球環境研究の現状を紹介しています。



これまでの開催実績

	テーマ	開催日	場所
第1回	水と人間生活	2006年11月6日-8日	国立京都国際会館
第2回	緑のアジア——その過去、現在、未来	2007年10月30日-31日	メルパルク京都
第3回	島の未来可能性: 固有性と脆弱性を越えて	2008年10月22日-23日	地球研講演室
第4回	境界のジレンマ ——新しい流域概念の構築に向けて	2009年10月20日-22日	地球研講演室
第5回	多様性の過去と未来	2010年10月13日-15日	地球研講演室
第6回	人間社会の未来可能性 Beyond Collapse(仮題)	2011年10月26日-28日	地球研講演室(予定)

第5回地球研国際シンポジウム
「多様性の過去と未来」

● 地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い提起やディスカッションを行うことを目的としています。フォーラム形式にて年1回開催。2004年からは広く市民の理解に供するために、その成果を『地球研叢書』として刊行しています。(地球研叢書については68ページを参照)



これまでの開催実績 場所: 国立京都国際会館

	テーマ	開催日
第1回	地球環境学の課題——統合理解への道	2002年5月17日
第2回	地球温暖化——自然と文化	2003年6月13日
第3回	もし生き物が減っていくと——生物多様性をどう考える	2004年7月10日
第4回	断ち切られる水	2005年7月9日
第5回	森は誰のものか?——森と人間の共生を求めて	2006年7月8日
第6回	地球環境問題としての「食」	2007年7月7日
第7回	もうひとつの地球環境問題——会うことのない人たちとともに	2008年7月5日
第8回	よく生きるための環境——エコヘルスをデザインする	2009年7月5日
第9回	私たちの暮らしのなかの生物多様性	2010年7月10日
第10回	足もとの水を見つめなおす(仮題)	2011年7月3日(予定)

第9回地球研フォーラム
「私たちの暮らしのなかの生物多様性」

● 地球研市民セミナー

地球研の研究成果や地球環境問題の動向を分かりやすく一般市民に紹介することを目的に、本研究所または京都市内の会場において定期的に開催しています。会場からは熱心な質問が毎回よせられています。2010年度より夏休み期間中に、小学生を対象とした地球研キッズセミナーをはじめました。専門用語や難しい概念を使わずに、環境の大切さを伝えるようにつとめました。参加者は所内のプロジェクトを訪問しました。外国の生活や調査の様子を研究員から直接聞けるのは好評でした。



第38回地球研市民セミナー
「キョウト遺産 VS. シンヤ遺産——まちの力を未来につなげる」

これまでの開催実績

	テーマ	開催日	講演者
第1回	シルクロード地域のロマンと現実	2004年11月 5日	中尾正義(地球研教授)
第2回	琵琶湖の水環境を守るには——琵琶湖流域での研究活動から	2004年12月 3日	谷内茂雄(地球研助教授) 中野孝教(地球研教授)
第3回	亜熱帯の島・西表の自然と暮らし	2005年 2月 4日	高相徳志郎(地球研教授) 他
第4回	21世紀をむかえた世界の水問題	2005年 3月 4日	鼎信次郎(地球研助教授)
第5回	地球温暖化、ホント?ウソ?	2005年 4月 1日	早坂忠裕(地球研教授)
第6回	地球温暖化と地域の暮らし・環境——トルコの水と農から	2005年 6月 3日	渡邊紹裕(地球研教授) 他
第7回	鴨川と黄河——その災いと恵み	2005年 9月 2日	福嶋義宏(地球研教授)
第8回	東南アジアの魚と食	2005年10月 7日	秋道智彌(地球研教授)
第9回	生き物の豊かな森は持続的な社会に必要である	2005年12月 2日	中静 透(地球研教授)
第10回	環境の物語り論——環境の質と環境意識	2006年 2月 3日	吉岡崇仁(地球研助教授)
第11回	アムール川・オホーツク海・知床——巨大魚付林という考え	2006年 3月 3日	白岩孝行(地球研助教授)
第12回	モンスーンアジアからシルクロードへ——ユーラシア環境史事始	2006年 4月14日	佐藤洋一郎(地球研教授)
第13回	どうなる日本の自然? どうなる日本の国土?	2006年 6月 9日	湯本貴和(地球研教授)
第14回	なぜインダス文明は崩壊したのか	2006年 9月22日	長田俊樹(地球研教授)
第15回	大地の下の「地球環境問題」	2006年10月20日	谷口真人(地球研助教授)
第16回	「景観」は生きている	2006年12月 1日	内山純蔵(地球研助教授)
第17回	病気もいろいろ——人の医者、環境の医者	2007年 3月 9日	川端善一郎(地球研教授) 奥宮清人(地球研助教授)
第18回	シルクロード——人と自然のせめぎあい	2007年 4月20日	窪田順平(地球研准教授)
第19回	途上国農村のレジリエンスを考える	2007年 5月25日	梅津千恵子(地球研准教授)
第20回	鎮守の森は原始の照葉樹林の生き残りか?	2007年 9月21日	小椋純一(京都精華大学教授) 湯本貴和(地球研教授)
第21回	京都の世界遺産——上賀茂の杜からのメッセージ	2007年10月12日	村松晃男(上賀茂神社権禰宜) 秋道智彌(地球研副所長・教授)
第22回	生きものにとって自然の森だけが大切なのか?——熱帯と温帯の里山	2007年11月 9日	阿部健一(京都大学地域研究統合情報センター准教授) 市川昌広(地球研准教授)
第23回	地域・地球の環境——市民の役割・研究者の責任	2008年 2月15日	石田紀郎(京都学園大学教授) 渡邊紹裕(地球研教授)
第24回	黄河と華北平原の歴史	2008年 3月14日	木下鉄矢(地球研教授) 福嶋義宏(地球研教授)
第25回	マレーシア熱帯林とモンゴル草原の大自然と環境破壊	2008年 4月18日	酒井章子(地球研准教授) 藤田 昇(京大大学生態学研究所センター助教) 山村則男(地球研教授)

研究成果の発信

テーマ	開催日	講演者
第26回 地球環境の変化と健康——人々のライフスタイルを変えるには	2008年 5月16日	門司和彦(地球研教授) 奥宮清人(地球研准教授)
第27回 捕鯨論争——21世紀における人間と野生生物の関わりを考える	2008年 9月19日	星川 淳(NPO法人グリーンピース・ ジャパン事務局長) 秋道智彌(地球研副所長・教授)
第28回 年輪年代学——過去から未来へ	2008年10月17日	光谷拓実(地球研客員教授) 佐藤洋一郎(地球研副所長・教授)
第29回 厳寒のシベリアに暮らす人々と温暖化	2008年11月21日	井上 元(地球研教授) 高倉浩樹(東北大学東北アジア研究セン ター准教授)
第30回 里山・里海から SATOYAMA SATOUMI へ	2009年 1月23日	あん・まくどなど(国連大学高等研究所 いしかわ・かなざわオペレーティング・ユ ニット所長) 阿部健一(地球研教授)
第31回 南極から地球環境がよく見える	2009年 3月13日	中尾正義(人間文化研究機構理事) 斎藤清明(地球研教授)
第32回 石油資源がなくなったとき、どうやって生活していきますか？	2009年 4月17日	嶋田義仁(名古屋大学大学院文学研究科教授) 縄田浩志(地球研准教授)
第33回 世界の水、日本の水——21世紀の日本の役割	2009年 6月19日	竹村公太郎(日本水フォーラム事務局長・財 団法人リバーフロント整備センター理事長) 渡邊紹裕(地球研教授)
第34回 万物共存の哲学——環境思想としての朱子学	2009年 9月11日	木下鉄矢(地球研教授) 鞍田 崇(地球研プロジェクト上級研究員)
第35回 中国の環境問題——国際的民間協力の役割と可能性	2009年10月16日	高見邦雄(認定NPO法人緑の地球ネット ワーク事務局長) 窪田順平(地球研准教授)
第36回 現代インドの経済発展と環境問題	2009年12月18日	ヴィカース・スワループ(駐大阪神戸イン ド総領事) 長田俊樹(地球研教授)
第37回 地球温暖化と水	2010年 2月16日	真鍋淑郎(プリンストン大学大気海洋研 究プログラム上級研究員) 阿部健一(地球研教授)
第38回 キョウト遺産 VS. シブヤ遺産——まちの力を未来につなげる	2010年 4月16日	中川 理(京都工芸繊維大学教授) 村松 伸(地球研教授)
第39回 ねんてんさんに訊く「俳句と環境問題」	2010年 6月18日	坪内稔典(佛教大学教授) 阿部健一(地球研教授)
第40回 石油資源がなくなったとき、どうやって生活していきますか？ ——その2	2010年 9月17日	鷹木恵子(桜美林大学教授) 石山 俊(地球研プロジェクト研究員)
第41回 神話から学ぶ人間と自然とのありかた ポプ・サムさんによるストーリーテリング	2010年11月30日	ポプ・サム(アラスカ・クリンギット族) 羽生淳子(地球研招へい研究員/カリフォル ニア大学バークレー校准教授)
第42回 水俣に学ぶ——公害から地球環境問題へ	2011年 2月15日	原田正純(元熊本学園大学教授) 門司和彦(地球研教授) 阿部健一(地球研教授)
第1回 地球研キッズセミナー	2010年 8月23日	富田京一(肉食爬虫類研究所代表) 縄田浩志(地球研准教授)



第1回 地球研キッズセミナー





パネルディスカッションの様子

● 地球研地域連携セミナー

国内の大学や研究機関と協働で行うセミナーです。地域には地域固有の環境問題があります。一方で、そのような環境問題は、世界のほかの地域でも見られます。世界と日本で共通する課題について、地元の大学・研究機関・行政とともに、問題の根底を探り、解決のための方法を考えてゆくセミナーです。



第8回地球研地域連携セミナー「多様性の伝えかた——子どもたちのための自然と文化」パネル展示風景

これまでの開催実績

回数	テーマ	開催日	場所
第1回	雪と人——暮らしをささえる日本海	2005年 9月17日	富山県富山市
第2回	火山と水と食：鹿児島を語る！	2006年 9月18日	鹿児島県鹿児島市
第3回	伊豆の、花と海。——伊東から考える地球環境	2007年 9月15日	静岡県伊東市
第4回	災害と「しのぎの技」 ——池島・福万寺遺跡が語る農業と環境の関係史	2008年11月 8日	大阪府和泉市
第5回	やんばるに生きる ——自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光	2009年 2月13日 2009年 2月14日	沖縄県名護市 沖縄県国頭村
第6回	山・ひと・自然——厳しい自然を豊かに生きる	2009年 11月28日	長野県松本市
第7回	にほんの里から世界の里へ	2010年 2月 6日	石川県金沢市
第8回	多様性の伝えかた——子どもたちのための自然と文化	2010年 10月10日	愛知県名古屋
第9回	ユーラシアへのまなざし ——ソ連崩壊20年後の環境問題	2011年 6月12日	北海道札幌市 (予定)

● その他

地球研では、その他に次のようなイベントを行政組織、経済団体、学術・研究機関等と連携して開催し、「総合地球環境学」の構築へ向けて幅広く議論を行っています。

地球研東京セミナー

地球研の成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティ等にさらなる理解と協力を呼びかけていくため、東京でのセミナーを開催しています。2009年度は、特に第Ⅱ期で重要な地球環境問題の一つとして取り上げる「水」をテーマにしました。2010年度は、人間文化研究機構公開講演会・シンポジウムの枠組で「食」について討論しました。2011年度は国際森林年にあわせて「森林」をテーマとする予定です。日本を代表する研究者や現場の問題を扱う行政官を招いて、最新の成果と課題を討論します。



第2回地球研東京セミナー
「食：生物多様性と文化多様性の接点」

これまでの開催実績

回数	テーマ	開催日	場所
第1回	人・水・地球——未来への提言	2009年10月 9日	霞山会館
第2回 (人間文化研究機構第13回公開講演会・シンポジウム)	食：生物多様性と文化多様性の接点	2010年 7月16日	有楽町朝日ホール

京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム

地球温暖化をはじめとする地球環境問題を解決するため、京都府、京都大学、京都府立大学等とともに、環境・経済・文化等の分野にわたる国際的な学術会議を2009年度から開催しています。生活の質を高めながら自然との共生や持続可能な社会を形成する新たな価値観や経済・社会のしくみを、京都から世界に向けて発信・提案することを目的としています。本国際シンポジウムは、「京都地球環境の日(2月16日)」の記念行事と位置付け、「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式と同時に毎年2月中旬に国立京都国際会館で開催いたします。



2011年2月に開催した京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム「グローバルコモンズをめざして——自然と文化を大切にしたい幸福な社会」

KYOTO 地球環境の殿堂

「京都議定書」誕生の地である京都の名のもとに、世界で地球環境の保全に多大な貢献をした実務家、研究者等の顕彰を行います。その功績を永く後世にひきつぎ、京都から世界に向けて広く発信することにより、地球環境問題の解決に向けたあらゆる国、地域、人々の意志の共有と取組の推進に資することを目的としています。本顕彰は、「KYOTO地球環境の殿堂」運営協議会(京都府・京都市・京都商工会議所・環境省・国際高等研究所・国立京都国際会館・地球研)が中心となり、環境分野の専門家、学識者、活動家等で構成する選考委員会で選考されます。



「KYOTO地球環境の殿堂」運営協議会会長の立本成文地球研所長より表彰状を授与される原田正純氏

KYOTO 地球環境の殿堂入り者

受賞者

第1回	グロ・ハルレム・ブルントラント氏 真鍋淑郎氏 ワンガリ・マータイ氏	元ノルウェー首相 プリンストン大学上級研究員 2004年ノーベル平和賞	「持続可能な開発」概念を世界に提唱 気候変動を新たなモデルで分析し、地球科学分野で活躍 「もったいない」を環境のキーワードとして世界に広める
第2回	シグミ・シング・ワンチュク陛下 原田正純氏 エリノア・オストロム氏	ブータン王国第4代国王 元熊本学園大学教授 2009年ノーベル経済学賞	「国民総幸福度」(Gross National Happiness GNH)の概念を提唱 水俣病をはじめとした公害問題の社会医学的な研究 コモンズ(共有資源)の理論的・実証的な研究

日文研・地球研合同シンポジウム

本シンポジウムでは、日本文化や自然思想の立場から地球環境問題を問い直し、人間文化研究機構における新しい人間文化研究の可能性として、日本文化の研究が地球環境問題にいかなる貢献をすることができるかについて提案することを目的としています。

日本文化と地球環境問題、大きく異なる2つの分野の研究を進めている国際日本文化研究センターと地球研が中心となって、地球環境問題の本質について積極的に対話しています。



第3回日文研・地球研合同シンポジウム「京都の文化と環境——森や林」

これまでの開催実績

	タイトル	開催日	開催場所
第1回	山川草木の思想——地球環境問題を日本文化から考える	2008年6月21日	シルクホール
第2回	京都の文化と環境——水と暮らし	2009年5月9日	日文研講堂
第3回	京都の文化と環境——森や林	2010年5月22日	日文研講堂
第4回	環境問題はなぜ大事か——文化から見た環境と環境から見た文化(仮題)	2011年5月21日	日文研講堂(予定)

地球研セミナー

国内・海外の研究機関で地球環境関連の研究を行っている精鋭の研究者を講師として招へいし、地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有することにより、広い視座から地球環境学を捉えようとするセミナーです。セミナーは所外にも開かれており、所員だけではなく関連分野の研究者も多数参加しています。

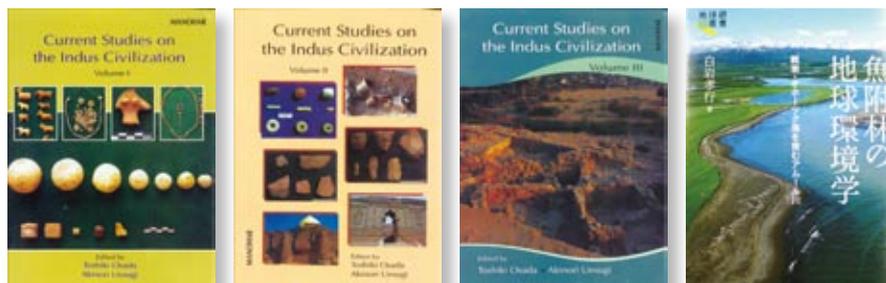
談話会セミナー

談話会セミナーはお昼ごはんを食べながら行うランチ・セミナーです。地球研では、多様な研究分野に対する相互の理解とともに、地球環境問題という共通テーマに沿った不断の議論を重ねることが求められています。座談会セミナーでは、地球研の若手研究者を演者として、各自の研究バックグラウンドを踏まえつつ、多くの所員にとって共通の話題を提供し、研究者相互の理解と交流を深めることを目的として開催しています。

2010年度開催実績

タイトル	開催日	演者
縄文・近世・現代における中大型哺乳類の分布変遷	2010年 4月 6日	辻野 亮
漁業者参加型の超高解像度海洋予測システムによる近未来沿岸漁業 ——漁師にとってその予測はありがたいのか？	2010年 4月20日	中田聡史
Agricultural Innovation, Land-Cover Change and Household Inequality: The Transition from Swidden Cultivation to Rubber Plantations in Laos PDR	2010年 5月18日	EVANS, Tom
宇宙から見た自然災害——シベリアを例として	2010年 6月 1日	酒井 徹
気候モデルからみた地球温暖化	2010年 6月15日	安富奈津子
昆虫を指標に、持続的な森林利用を考える	2010年 6月29日	岸本圭子
病原性ウイルスの環境動態	2010年 7月 6日	本庄三恵
生活環境における人間活動の実態解明の試み ——ポータブル GPS 及び加速度計を用いた活動調査法の確立に向けて	2010年 7月20日	蔣 宏偉
環境 DNA を用いた魚類相把握のとりくみ	2010年10月 5日	源 利文
東南アジアにおける大規模森林開発と地域社会への影響	2010年10月19日	加藤裕美
過去と現在における狩猟採集民の生活とその変化——歴史生態学からのアプローチ	2010年11月 9日	羽生淳子
シベリアにおける地球温暖化	2010年11月16日	藤原潤子
地域主義と環境ガバナンス：東アジアにおける地域経済協力の事例	2010年11月30日	UYAR, Aysun
東シベリア永久凍土帯に分布する湧水群——それらは温暖化に対し脆弱なのか？	2011年 1月11日	檜山哲哉
Wood Culture in Pre-Modern China and Wood Identification: Sculptures, Buildings, Excavated Remains	2011年 1月18日	MERTZ, Mechtild
ラオス北部のイネ在来品種の遺伝的多様性はどのように維持・保存されているか？	2011年 2月 1日	武藤千秋
ウリの伝播を考える	2011年 2月15日	田中克典
退耕還林の理想と現実——中国の農村の未来可能性	2011年 3月 1日	松永光平
日本列島におけるヒトの食生態の変遷と動物とのかかわり	2011年 3月15日	石丸恵利子
景観史研究の試み：「中国」文化形成の基層性と多様性	2011年 3月29日	楨林啓介

● 刊行物



地球研叢書

地球研の研究や成果の意味を学問的に分かりやすく紹介する出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
1 生物多様性はなぜ大切か？	日高敏隆 編	昭和堂	2005年 4月
2 中国の環境政策 生態移民 —緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？	小長谷有紀、シンジルト、中尾正義 編	昭和堂	2005年 7月
3 シルクロードの水と緑はどこへ消えたか？	日高敏隆、中尾正義 編	昭和堂	2006年 3月
4 森はだれのものか？—アジアの森と人の未来	日高敏隆、秋道智彌 編	昭和堂	2007年 3月
5 黄河断流—中国巨大河川をめぐる水と環境問題	福嶋義宏 著	昭和堂	2008年 1月
6 地球の処方箋—環境問題の根源に迫る	総合地球環境学研究所 編	昭和堂	2008年 3月
7 食卓から地球環境がみえる—食と農の持続可能性	湯本貴和 編	昭和堂	2008年 3月
8 地球温暖化と農業—地域の食料生産はどうなるのか？	渡邊紹裕 編	昭和堂	2008年 3月
9 水と人の未来可能性—しのびよる水危機	総合地球環境学研究所 編	昭和堂	2009年 3月
10 モノの越境と地球環境問題—グローバル化時代の〈知産知消〉	窪田順平 編	昭和堂	2009年10月
11 安定同位体というメガネ—人と環境のつながりを診る	和田英太郎、神松幸弘 編	昭和堂	2010年 3月
12 魚附林の地球環境学—親潮・オホーツク海を育むアムール川	白岩孝行 著	昭和堂	2011年 3月

地球研ライブラリー

地球研の研究者らが自らの研究成果を広く紹介する学術出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
1 クスノキと日本人—知られざる古代巨樹信仰	佐藤洋一郎 著	八坂書房	2004年10月
2 世界遺産をシカが喰う—シカと森の生態学	湯本貴和・松田裕之 編	文一総合出版	2006年 3月
3 ヒマラヤと地球温暖化—消えゆく氷河	中尾正義 編	昭和堂	2007年 3月
4 Indus Civilization: Text and Content	長田俊樹 編	Manohar	2007年 3月
5 人はなぜ花を愛でるのか	日高敏隆・白幡洋三郎 編	八坂書房	2007年 3月
6 農耕起源の人類史	ピーター・ベルウッド 著 長田俊樹、佐藤洋一郎 監訳	京都大学 学術出版会	2008年 7月
7 モンスーン農耕圏の人びとと植物 (ユーラシア農耕史 1)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2008年12月
8 日本人と米 (ユーラシア農耕史 2)	佐藤洋一郎 監修 木村栄美 編	臨川書店	2009年 3月
9 砂漠・牧場の農耕と風土 (ユーラシア農耕史 3)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2009年 6月
10 Indus Civilization: Text and Context Vol.2	長田俊樹 編	Manohar	2009年 9月
11 Linguistics, Archaeology and Human Past in South Asia	長田俊樹 編	Manohar	2009年 9月
12 ささまざまな栽培植物と農耕文化 (ユーラシア農耕史 4)	佐藤洋一郎 監修 木村栄美 編	臨川書店	2009年10月
13 農耕の変遷と環境問題 (ユーラシア農耕史 5)	佐藤洋一郎 監修 鞍田 崇 編	臨川書店	2010年 1月
14 Current Studies on the Indus Civilization Vol.1-3	長田俊樹・上杉彰紀 編	Manohar	2010年 8月

地球研ニュース (Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考え、どのような活動を行っているのか、また所員には誰がいて、どのような研究活動をしているかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、隔月で刊行しています。No.16から内容体裁をリニューアルし、それに合わせて編集室を充実させました。特に地球研に関わっている内外の研究者を対象に、コミュニケーションの場の一つとして機能することを目指しています。



地球環境学事典

10周年を迎えるにあたって『地球環境学事典』(弘文堂)を編集しました。個々のプロジェクトの成果は、これまでもさまざまな媒体で発信してきました。しかし広いスペクトルをもつプロジェクトの成果を、地球研として一つのまとまった形で問うたことはありませんでした。

今回、初めての試みとして、地球研のこれまでの成果を、「事典」という形で公表しました。地球環境問題のさまざまな課題について、単なる解説ではなく、これからどのように対応してゆかなければならないのか、「考えさせる」事典を目指しました。専門用語に頼らず、平易な言葉で高校生にもわかるようにしたのも工夫を凝らした点です。



国連子ども環境ポスター

地球研には、世界中の子どもたちが描いた環境に関わるポスターがあります。その数約20万点。1991年から毎年開催されている『国連子供環境ポスター原画コンテスト』(主催:国連環境計画、地球環境平和財団ほか)の全応募作品が寄贈されているのです。優秀作として選ばれた作品は、国連本部で展覧会を行い、絵葉書やカレンダーになっています。

応募作品の一つ一つに、地域・民族・年齢の異なる子どもたちの自然や環境保全についての考えが反映されています。この貴重な資料を活用して、これまで日進市西小学校(愛知県)、金沢大学附属小学校(石川県)、河合第三小学校(奈良県)、立命館小学校(京都市)、Atorium小学校(ケンブリッジ、USA)、ボストン子ども博物館(ボストン、USA)でワークショップを実施してきました。自分たちで展覧会を開催したり、かるたを作ったりしながら、子どもたちは、地球環境についての世界の子どもの思いについて学ぶことができました。



ABRAHAM, Aby (カタル)



2010年の審査会は地球研で開催されました

施設の紹介

地球研では、そこに集うスタッフが絶え間なく議論を繰り返し、互いに切磋琢磨できる環境を整備することが肝要であると考えています。このコンセプトは施設の設計に大きく反映されています。

地球研施設にある研究室は、なだらかに弧を描いた全長150mの大空間にすべての研究プロジェクトが有機的な連携をもつよう開放的に設計されています。内部だけでなく外来のさまざまな研究者が相互に接触できる施設の共同利用性の機能を最優先するように配慮したものとなっています。研究プロジェクトごとの独自性にもとづく共同研究を可能にし、しかもそれらを相互に有機的につなぐ空間配置が特徴となっています。建物のほぼ中央には、研究者が共通に利用する図書室や情報処理室を配置するとともに、日常的な議論を行うための沙龙的な空間も準備されています。また、地階には、機能に応じた実験室がクラスター群として設置され、研究室と同様、共同利用における利便性と連携性を重視した設計となっています。

別棟になっている「地球研ハウス」は、宿泊を主として設備した施設です。ハウス入り口左手にあるアセンブリーホールとダイニングサロンは、宿泊者に限ることなく地球研関係者が集う場所としてオープンに使えるようになっています。

また地球研の建物は、地球環境を研究する機関にふさわしく、京都の景観と違和感のない瓦葺きの建物となっており、施工前にあった樹木もできるだけ活かして工事を行いました。採光や空調に関しても、環境へのインパクトを抑えるための最新の工夫がなされています。

■ 施設の概要

敷地面積 3万1354.17m²

建築面積 6256.68m²(本館:5609.59m²、地球研ハウス:647.09m²)

延べ面積 1万3154.37m²(本館:1万2195.20m²、地球研ハウス:959.17m²)

構造 本館:RC造一部S造、地球研ハウス:RC造

階数 本館:地下1階 地上2階、地球研ハウス:地下1階 地上2階

■ 本館立面図



地球研本館

地球研ハウス

地球研本館と地球研ハウス

● 実験室

地球研の研究プロジェクトは、日本国内のみならず世界各地で行われています。研究の対象や方法も多岐にわたっているの

で、地球表層環境やその構成物質に対して物理計測、化学分析、生物解析などを高いレベルで行うことができる研究環境が必要です。地球研の地下1階にある18の実験室は、こうした多様な環境研究の要望に応えられるように設計されており、顕微鏡観察や安定同位体分析、DNA分析など、研究対象や実験目的に応じた施設整備がなされています。その他にも、観測機器や試料採取装置の保管・調整を行う野外調査準備室、生物や氷床コアなどの試料を保管・処理する低温保管室、人工的な環境で生物を育てる培養室、汚染のない環境で試料を処理するクリーンルームなど、異なる機能を持つ実験室が整備されています。



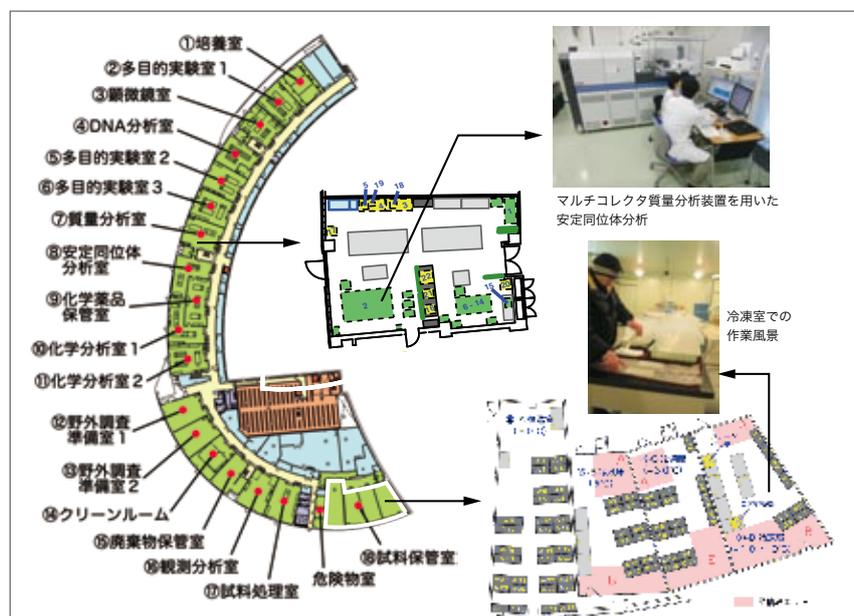
多目的実験室1での作業風景

機器・装置類

地球研では、各プロジェクトが購入して専有的に利用する機器の他、汎用性が高く新しい地球環境研究への発展が期待される先端的な共通機器を重点的に整備しています。大学共同利用機関として共同研究を促進するために、研究推進戦略センターの研究推進部門が中心となって、これら機器類を用いた手法開発や維持を行う一方で、手法が確立した分析法については手順のマニュアル化を行っています。地球研では特に、近年様々な環境研究に適用されている安定同位体比分析装置を中心に据えつつ、各種分析機器の整備を図っています。実験に共通して利用する消耗品類については、まとめて購入して各プロジェクトで常時利用できるようになっています。

維持管理

研究施設の維持や管理は、研究推進部門と実験室を利用するプロジェクトが協力しながら行っています。2010年度の実験施設利用者は44機関、200名ほどです。年度ごとにプロジェクトが新しいものに入れ替わるので、実験施設利用に関するガイダンスのほか、実験施設を実際に利用しているスタッフによる情報交換を年に数回行っています。実験室や機器、保管試料の情報のほか、施設利用法や機器利用マニュアルなどの情報は、実験施設のホームページで閲覧できます。2011年度には各種安定同位体分析機器の設置が進み、様々な環境診断に対応できる環境が整備されるので、それらを用いて「同位体環境学」の構築に向けた活動を展開する予定です。



ホームページを通じた利用者への情報提供

● 沿革

- 1995** (平成7年) 4月 ● 「地球環境科学の推進について」(学術審議会建議)
「地球環境問題の解決を目指す総合的な共同研究を推進する中核的研究機関を設立することを検討する必要がある。」
- 7月 ● 文部省、学術審議会建議を受け「地球環境科学の研究組織体制の在り方に関する調査研究会」を設置
- 1997** (平成9年) 3月 ● 「地球環境科学に関する中核的研究機関のあり方に関する研究報告書」(地球環境科学の中核的研究機関に関する調査研究会)
- 6月 ● 「地球環境保全に関する当面の取組」(地球環境保全に関する関係閣僚会議)
「幅広い学問分野の研究者が地球環境問題について、総合的に研究を行うことができるよう、地球環境科学の研究組織体制の整備に関する調査研究を行う。」
- 1998** (平成10年) 4月 ● 地球環境科学研究所(仮称)の準備調査を開始
- 2000** (平成12年) 3月 ● 地球環境科学研究所(仮称)準備調査委員会、人文・社会科学から自然科学にわたる学問分野を総合化し、国内外の大学、研究機関とネットワークを結び、総合的な研究プロジェクトを推進するための「総合地球環境学研究所(仮称)」の創設を提言
- 4月 ● 総合地球環境学研究所(仮称)創設調査室を設置するとともに創設調査機関に創設調査委員会を設置
- 2001** (平成13年) 2月 ● 「総合地球環境学研究所(仮称)の構想について」(最終報告)(創設調査委員会)
- 4月 ● 総合地球環境学研究所の創設
国立学校設置法施行令の一部を改正する政令(平成13年政令第151号)の施行に伴い、総合地球環境学研究所を創設し、京都大学構内において研究活動を開始。初代所長に日高敏隆が就任
- 2002** (平成14年) 4月 ● 旧京都市立春日小学校(京都市上京区)へ移転
- 2004** (平成16年) 4月 ● 大学共同利用機関の法人化に伴い、「大学共同利用機関法人 人間文化研究機構」に所属
- 2005** (平成17年) 12月 ● 新施設(京都市北区上賀茂本山)竣工
- 2006** (平成18年) 2月 ● 旧春日小学校より新施設(京都市北区上賀茂本山)へ移転
- 5月 ● 総合地球環境学研究所施設竣工記念式典を実施
- 2007** (平成19年) 4月 ● 立本成文が第二代所長に就任
- 5月 ● 副所長を設置
- 10月 ● 研究推進センターを研究推進戦略センターに改組

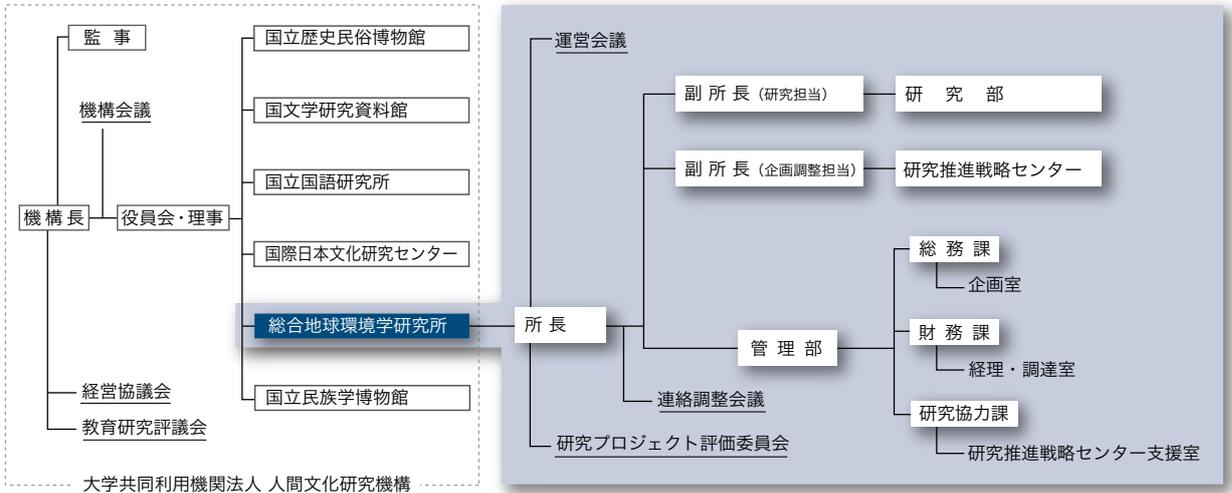


創設時の地球研(2001年4月～2002年3月)



旧春日小学校時代の地球研(2002年4月～2006年1月)

● 組織図



● 財務・外部資金等

■ 財務セグメント情報 (2009年度)

業務費用

種別	金額 (千円)
業務費	2,161,952
共同利用・共同研究経費	1,131,399
教育研究支援経費	56,351
受託研究費	61,218
人件費	912,982
一般管理費	187,405
財務費用	63,899

費用計 2,413,258

業務損益

業務収益

種別	金額 (千円)
運営費交付金収益	2,160,702
受託研究等収益	75,469
寄付金収益	6,925
その他	188,607

収益計 2,431,705

18,447

■ 外部資金等受入額 (2009年度)

区分	金額 (千円)
産学連携等研究費	78,299
科学研究費補助金	78,580
寄附金	10,375

※産学連携等研究費は、受託研究および共同研究経費を合算したものです。



現在の地球研(2006年2月～)

● 運営組織と役割 (2011年4月1日現在)

■ 運営会議 研究所の人事、事業計画、その他管理運営に関する重要事項について審議します。

岩坂泰信	金沢大学フロンティアサイエンス機構特任教授	秋道智彌	総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授
白幡洋三郎	国際日本文化研究センター研究部教授	阿部健一	総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授
藤井理行	国立極地研究所長	佐藤洋一郎	総合地球環境学研究所副所長・研究推進戦略センター長
古澤 巖	鳥取環境大学長	谷口真人	総合地球環境学研究所プログラム主幹
安成哲三	名古屋大学地球水循環研究センター教授	湯本貴和	総合地球環境学研究所プログラム主幹
横山俊夫	京都大学人文科学研究所教授	渡邊紹裕	総合地球環境学研究所副所長
米本昌平	東京大学先端科学技術研究センター特任教授		
鷲田清一	大阪大学総長		

■ 研究プロジェクト評価委員会 研究所の特定共同研究に関し、必要な事項を専門的に調査審議します。

(国内委員)		(海外委員)	
岩坂泰信	金沢大学フロンティアサイエンス機構特任教授	IKAWA-SMITH, Fumiko	Former Associate Vice Principal, McGill University, CANADA
大塚柳太郎	(財)自然環境研究センター理事長	OHMURA Atsumu	Professor, Swiss Federal Institute of Technology, SWITZERLAND
田中耕司	京都大学次世代研究者育成センター特任教授	BELLWOOD, Peter	Professor, School of Archaeology and Anthropology, The Australian National University, AUSTRALIA
植田和弘	京都大学大学院地球環境学教授	FU, Congbin	Director, START Regional Center for Temperate East Asia, CHINA; Research Professor, Institute of Atmospheric Physics(IAP)/Chinese Academy of Sciences(CAS), CHINA
山形俊男	東京大学大学院理学系研究科長	LOVEJOY, Thomas E.	President, The H. John Heinz III for Science, Economics and the Environment, USA
横山俊夫	京都大学人文科学研究所教授	CHUN Kyung-soo	Professor, Department of Anthropology Seoul National University, KOREA
中村雅美	江戸川大学情報文化学科教授		
虫明功臣	法政大学大学院工学研究科客員教授・ (財)河川環境管理財団総括研究顧問		

■ 連絡調整会議 研究所の円滑な運営を図るため、研究所の管理運営に関する重要事項を審議します。

立本成文	所長	川端善一郎	プログラム主幹	門司和彦	プログラム主幹
佐藤洋一郎	副所長・研究推進戦略センター長	谷口真人	プログラム主幹	湯本貴和	プログラム主幹
渡邊紹裕	副所長	中野孝教	プログラム主幹	井深順二	管理部長

※その他、研究所の業務に関して必要な事項を専門的に審議し、また、実施に当たるため、各種委員会を設置しています。

● 名誉教授等 (2011年4月1日現在)

■ 名誉教授 (称号授与年月日)	日高敏隆 (2007年4月1日) (没2009年11月)	■ 特別客員教授
中西正己 (2003年4月1日)	中尾正義 (2008年4月1日)	木下鉄矢
和田英太郎 (2004年8月1日)	福嶋義宏 (2008年4月1日)	

● 所 員 (2011年4月1日現在)

■ 所 長	立本成文	■ 副所長	佐藤洋一郎 (企画調整担当) 渡邊紹裕 (研究担当)
-------	------	-------	-------------------------------

管理部 ■ 部 長 井深順二

■ 総務課		■ 財務課		■ 研究協力課	
課 長	岩坂 豊	課 長	南 健一	課 長	佐良俊久
課長補佐	八木清隆	課長補佐	藤原浩一	課長補佐	前野芳昭
総務係	係長 松尾 隆 主任 原 彰子	財務企画係	係長 山形哲史 係員 本田孝之	研究協力係	係長 新野正人 係員 高取庸子
人事係	係長 谷川喜隆 係員 岡内直子 係員 貴田佳実	施設管理係	係長 西川知延	国際交流係	係長 徳田美紀
企画室	室長 八木清隆 (併任)	経理・調達室	室長 藤原浩一 (併任)	研究推進戦略センター支援室	室長 前野芳昭 (併任)
企画評価係	係長 西村隆利 係員 中大路悠	経理・調達第一係	係長 八木 司	研究推進係	係長 三原一晃 係員 辻はな子
情報係	係長 西村隆利 (併任) 係員 中大路悠 (併任)	経理・調達第二係	係長 八木 司 (併任) 主任 村瀬真美子		

研究部

■ プログラム主幹

川端善一郎 (併任)
谷口真人 (併任)
中野孝教 (併任)
門司和彦 (併任)
湯本貴和 (併任)

〈プログラム主幹補佐〉

内山純蔵
梅津千恵子
窪田順平
酒井章子
檜山哲哉

■ 教授

長田俊樹 (言語学)
嘉田良平 (農政学・環境経済学)
川端善一郎 (微生物生態学)
佐藤洋一郎 (植物遺伝学)
谷口真人 (水文学)
村松 伸 (建築史・都市史)
門司和彦 (人類生態学)
山村則男 (数理生態学)
湯本貴和 (植物生態学)
渡邊紹裕 (農業土壌学)

■ 准教授

内山純蔵 (先史人類学)
梅津千恵子 (環境資源経済学)
奥宮清人 (フィールド医学)
窪田順平 (森林水文学)
酒井章子 (植物生態学)
縄田浩志 (文化人類学)
檜山哲哉 (生態水文学)

■ 客員教授

家田 修 (東欧地域研究・東欧経済史)
内堀基光 (文化人類学)
奥田敏統 (生態学)
加藤 剛 (比較社会学)
川崎昌博 (大気環境化学)
後藤多聞 (中国史・ドキュメンタリー制作)

小山修三 (考古学)
柴山 守 (地域情報学・人文情報学)
長尾誠也 (環境放射化学)
中島経夫 (魚類生態学)
氷見山幸夫 (地理学)
間藤 徹 (植物栄養学)

■ 客員准教授

石川智士 (保全生態学・国際水産開発学)
白岩孝行 (雪氷学)
田中 樹 (陸域生態系管理論)
藤田 昇 (草原生態学)

■ 招へい外国人研究員

HONG, Sung Heup (文化人類学・日本文化)
TKACHEV, Sergey Viktorovich (海洋学・政治学)
YAHYA, Andi Saputra (インドネシアのプタウィ民族の歴史)
ZAMBA, Batjargal (気象学・水文学)

■ プロジェクト上級研究員

C-06 源 利文 (分子生態学)
C-07 酒井 徹 (衛星生態学)
C-07 藤原潤子 (文化人類学)
R-03 承 志 (東洋史学)
R-06 増田忠義 (環境資源経済学)
R-06 RAZAFINDRABE, Bam Haja Nirina (災害リスク管理学)

H-03 大西正幸 (言語類型論)
H-03 森 若葉 (言語学・シュメール学)
H-04 榎林啓介 (考古学)
H-04 ZEBALLOS VELARDE, Carlos Renzo (都市環境計画)
E-04 LEKPRICHAKUL, Thamana (医療経済学)

■ プロジェクト研究員

C-06 安部 彰 (社会学・倫理学)
C-06 高原輝彦 (化学生態学)
C-06 本庄三恵 (環境微生物生態学)
C-07 大島和裕 (気候学・大気物理学)

C-07 小林菜花子 (森林気象)
C-08 林 憲吾 (東南アジア都市史・建築史)
C-08 松田浩子 (東南アジア都市史・建築史)
C-08 GUSEVA, Anna (東南アジア都市史・建築史)

C-08 MEUTIA, Ami Aminah (水文学)
D-03 小坂康之 (民族植物学)
D-03 坂本龍太 (公衆衛生学)
D-03 野瀬光弘 (森林資源管理学)
D-04 加藤聡史 (生態学)
D-04 高野宏平 (昆虫生態・植物生態)
R-03 奈良間千之 (自然地理学)
R-03 渡邊三津子 (地理学)
R-04 蔡 国喜 (社会医療調査)
R-04 蔣 宏伟 (人類生態学)
R-04 東城文柄 (地域研究・林学)
R-04 西本 太 (社会人類学)
R-04 福土由紀 (中国近代史)
R-05 石山 俊 (文化人類学)
R-05 市川光太郎 (生物音響学)
R-05 中村 亮 (文化人類学)
R-06 齊藤 哲 (同位体地球化学)
R-06 矢尾田清幸 (空間計量経済学)
H-03 遠藤 仁 (考古学)
H-04 中村 大 (日欧考古学)
H-04 細谷 葵 (植物考古学)
E-04 石本雄大 (生態人類学)
E-04 宮寄英寿 (土壌学)

■ プロジェクト研究推進支援員

C-06 伊吹直美 R-05 HAFIZ
C-06 増田芳恵 KOURA, Hafiz
C-07 清水宏美 Mohamed Fathy
D-04 北村直子 H-04 内門 恵
R-03 余田 眞 H-04 大谷めぐみ
R-05 石井 夢 H-04 嘉村 望
R-05 王 娜 E-04 伊藤千尋
R-05 水真咲子 E-04 WEYGANDT,
Mayumi Kanzaki

■ 地域研究推進センター研究員／中国環境問題研究拠点研究員

松永光平 (地理学)

研究推進戦略センター ■ センター長 佐藤洋一郎 (併任)

■ 部門長

戦略策定部門 谷口真人
研究推進部門 関野 樹
成果公開・広報部門 阿部健一

■ 基幹研究ハブ主査

湯本貴和

〈ネットワーク拠点形成オーガナイザー〉

秋道智彌

■ 教授

秋道智彌 (生態人類学)
阿部健一 (関連地域学)
佐藤洋一郎 (兼務)
谷口真人 (兼務)
中野孝教 (同位体地球環境学)
湯本貴和 (兼務)

■ 准教授

関野 樹 (情報学)

■ 助教

神松幸弘 (動物生態学)
NILES, Daniel (地理学)
UYAR, Aysun (国際関係論・国際政治経済)

■ 特任准教授

久米 崇 (土壌水文学)
鞍田 崇 (哲学)
半藤逸樹 (地球システム科学・数理モデリング)

■ 特任助教

安富奈津子 (気象・気候学)

交通案内



■ JR 京都駅からお越しの場合

地下鉄烏丸線「国際会館駅」下車。3番または4-1番出入口から出て、国際会館駅前バスターミナル「2」より京都バス40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」に乗車(約6分)し、「地球研前」下車。

■ 京阪沿線からお越しの場合

京阪本線「出町柳駅」で叡山電鉄鞍馬線に乗換えて「二軒茶屋駅」下車、徒歩10分。

■ 車・タクシーでお越しの場合

地下鉄烏丸線「国際会館駅」から「二軒茶屋駅」方面へ(約5分)。

